

日本子ども学会設立10周年を記念して、 世界おもちゃサミットと国際シンポジウムを開く

小林 登 (日本子ども学会名誉理事長)

日本子ども学会設立10周年の記念すべき学術集会「第10回子ども学会議」が、昨年10月12日・13日の2日間にわたり、かつて赤ちゃん研究を一緒にした岡山県立大学の渡辺富夫教授を会頭として大学で開かれた。設立10周年記念行事としては、第10回子ども学会議に先立つ6月9日に、東京おもちゃ美術館開館5周年を記念して、多田千尋美術館長を座長とする「世界おもちゃサミット」が早稲田大学・井深大記念ホールにて開かれ、「おもちゃで目指す平和な世界」をテーマに、おもちゃの研究者・製作者と子どもに関心をもつ研究者・実践家が話し合ったのである。また、学術集会翌日の10月14日には、イギリス・アメリカ・オーストラリアから演者を招き、お茶の水女子大学大学院の榊原洋一教授を座長として、岡山のベネッセコーポレーション本社講堂にて、「子どもの福祉と権利」をテーマとした国際シンポジウムが開かれた。残念ながら、急に体調不良になり10月の行事には参加できなかったが、出席された皆さんから大変立派な意義のある学会・シンポジウムであったと伺い、嬉しく思った。

考えてみると、子どもをめぐる諸問題の解決には子どもを包括的に捉える学際的な新しい「人間科学“human science”」が必要であると思い始めて20年近くになる。特に、1990年代に入って、ノルウェーから“Child Research”、イギリスから“Child Study”という新しい研究の動きが現れ始めてからは、私の考え方もますます強くなった。そんな中、私の考え方を実現しようと、渡辺教授、榊原教授をはじめ多くの方々のご支援を得て、10年程前にCRN、そして日本子ども学会を設立したのである。

「子ども学“Child Science”」がノルウェーの“Child Research”やイギリスの“Child Study”と全く同じとは言えないと思うが、目的とするところは同じであろう。「子ども学」は、現在直面している子ども問題の解釈に必要な「子どもの人間科学」なのである。この機会に、日本子ども学会の今後の大いなる飛躍を祈りたい。

—プロフィール—

小林 登 (こばやし のぼる)

医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。日本子ども学会名誉理事長。チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) 名誉所長。日本赤ちゃん学会名誉理事長。日本子ども虐待防止学会名誉会長。1954年、東京大学卒業。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞 (1984年)、毎日出版文化賞 (1985年)、国際小児科学会賞 (1986年)、勲二等瑞宝章 (2001年)、武見記念賞 (2003年) などを受賞。